【特集】第 11 回全国和牛能力共進会　全国初！３大会連続内閣総理大臣賞受賞！

畜産のまちの底力

９月７日から 11 日にかけて、「第 11 回全国和牛能力共進会」が宮城県で開催されました。小林からは宮崎県代表として 11 頭が出品され、肉牛の部で最高賞の内閣総理大臣賞を受賞。前回、前々回に続き３大会連続内閣総理大臣賞（日本一）となり、全国初の快挙を成し遂げました。

今月号では、出品者や関係者の取り組みやこれまで長い年月をかけて積み上げてきた歴史から日本一の和牛生産地小林の『ワケ』を紹介します。

日本一３連覇を目指し 5年間にわたり準備

効率的な和牛生産に向けた改良の成果を競う大会として、５年に１度開催されるのが、国内最大の和牛の祭典「全国和牛能力共進会」です。

この大会は、今後５年間「宮崎牛日本一」として日本、世界へとＰＲできるかどうかが決まる重要な大会。特に今回は、２０２０年の東京オリンピックの開催が控えていることもあり、平成19年、24年の過去２大会に続く、日本一３連覇への期待は今まで以上に高まっていました。

そのため、「日本一の努力と準備」のスローガンのもと農家とＪＡ、県や市などの関係者は、一体となって、前回大会から５年の長きにわたり、準備を重ねてきました。

また、平成22年の口蹄疫発生後にデビューした種雄牛の子牛が数多く出品されており、真の意味での復興が問われる大会でもありました。

内閣総理大臣賞を受賞 畜産技術の高さを証明

大会には、39道府県から５１３頭が出品。宮崎県からは９部門28頭、うち小林からは県内最多の６部門11頭が出品されました。

その中で、小林の代表牛は、肉牛の部の８区と種牛と肉牛の総合評価の部の７区の２部門で首席を獲得。さらに８区では、最高賞である内閣総理大臣賞も受賞しました。前回、前々回に引き続き３大会連続で最高賞を受賞しており、これは全国初の快挙です。

「３大会連続の日本一」の達成は、小林の畜産農家の活躍があったからこそ。今回の大会で、宮崎牛の一大産地として小林の畜産技術の高さを全国に証明しました。

【会場で輝いた引き手の皆さん】

1 馬場幸成さん（８区、優等賞首席・内閣総理大臣賞）**2** 平野文宏さん（８区／９区、優等賞 27 席）**3** 森田直也さん（７区、優等賞首席）**4** 土居義信さん（６区、優等賞２席）**5** 森田正明さん（３区、優等賞６席／７区）**6** JA 技術員の西立野義人さん（６区）**7** 市技術員の迫間杉太郎さん（６区）**8** 小林秀峰高校の曽山撤丙太さん（２区優等賞５席）**9** 山田和博さん（７区）

7	4	1
8	5	2
9	6	3

8区／内閣総理大臣賞受賞

石川澄廣（いしかわすみひろ）さん（69）、咲子（さきこ）さん（65）

牛に対する思いは人一倍 妥協を許さないその姿勢が 日本一の栄冠へと導いた

24ヶ月未満の若雄牛3頭1組を審査する8区で内閣総理大臣賞を受賞した石川澄廣さん、69歳。

「5年前も出品したが思うような結果を残せなかった。日本一3連覇がかかっている今大会のプレッシャーは大きかった。内閣総理大臣賞を獲得できたことは、嬉しさ以上にほっとした気持ちが強いです」。

石川さんが和牛農家を始めたのは38年前。当時、父から1頭の牛を譲り受けたことから始まりました。

「試行錯誤の日々でした。エサや床の広さなどを研究するため、九州各地、ときには大学教授に教えを乞うこともありました」。

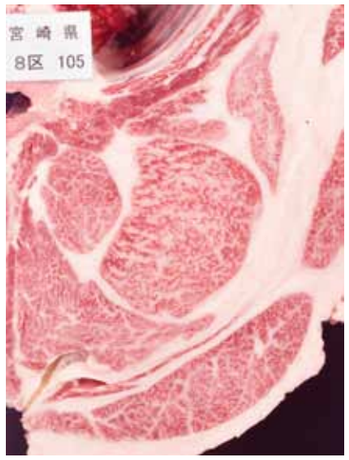
しかし、牛は生き物。一筋縄ではいきませんでした。20年以上取り組み続けて、やっと安定して生産できるように。少しずつ、経営を拡大していき、今では350頭を育てる肥育農家になりました。

「牛に対する思いは人一倍。少しの異変でも気付けるようにと、牛舎の休憩室に泊まり込むほどでした」と妻の咲子さん。

しかし、最近は体調を崩し、思うように牛の世話ができない日々が続いていました。

「今回は、娘婿（平野文宏（ひらのふみひろ））さん）が、思いを引き継ぎ、努力を惜しまなかったからこその結果です」と感謝の思いを語ります。

良い牛を作るために「一切の妥協を許さない」。その思いと姿勢、長年の努力が、日本一の栄冠へと導きました。



㊤内閣総理大臣賞を受賞し、応援団に向かって手を上げる馬場幸成さん（左）と平野さん（右）。㊦平野さんは「長距離移動で肉質に影響が出ないか不安だった。実際に枝肉を見て、これなら行けるとほっとした」と話していました。

6区／優等賞2席

土居（どい）義信（よしのぶ）さん（45）

口蹄疫を共に乗り越えた 思い入れのある牛での出品 支えてくれた人に感謝

母・娘・孫娘の3頭を審査する6区（高等登録群）で優等賞2席を獲得した土居義信さん、45歳。

「全共という大きな舞台に出場したのは初めてでした。日本一を目指していたので2席という結果には、正直、悔いがあります」。

出品牛のうち母牛と娘牛は、9歳と7歳。平成22年の口蹄疫を乗り越えてきた思い入れのある牛です。

「当時、隣の高崎町で口蹄疫が発生したとき、腹をくくったことを思い出します。牛と共に苦しい思いをしてきたからこそ、日本一を目指そうと心に強く誓いました」。

代表牛に決まってから、地域の農家が飼料畑の収穫の手伝いやJAと市の職員が調教の手伝いをしてくれるなど多く人の協力を得ながら準備をしてきました。

「特に、成長して自我のある母牛を調教するのに本当に苦労しました。全共の準備は日常の仕事とは全くの別物です。周りの支えがあったからこそ、全共の準備の時間ができて、大会に臨めたので、感謝の気持ちでいっぱいです」。

また、全共を通して「一緒に出場した小林秀峰高校の生徒が積極的に私たちの手伝いをしてくれた。その姿から『牛が大好き』という思いを感じ、良い牛を作るためには、牛への愛情が必要不可欠であることを再確認させてもらいました」と話します。

多くの人のつながりの中でさらに良い牛をこれからも作り続けていきます。

㊤会場でも準備を怠らない。㊥息子の悠弥（ゆうや）さん（16）も会場で手伝いを。「全国トップレベルの牛を、子どもに肌で感じてほしかった」と土居さん。㊦「多くの人の思いが詰まっていたので、2席になり涙をこらえきれませんでした」。

INTERVIEW

和牛の未来を担う子どもたち

今回の全共では、和牛の未来を担う高校生の活躍が目立ちました。
彼らは、畜産のまち小林にとってかけがえのない「宝」です。
一流の農家と肩を並べて大会に出場した子どもたちに話を聞きました

小林秀峰高校農業クラブ
井料姫花（いりょうひめか）さん（16）

きついとき、いつも牛に励まされた この大舞台に立てたことが誇り

今回の全共では、小林秀峰高校の農業クラブが2区で代表に選ばれ、優等賞5席に輝きました。

この牛を担当したのが、井料姫花さん、16歳です。

「首席を狙っていたので悔しさが大きいです。しかし、この大舞台に立てたことを誇りに感じています」。

同クラブの生徒ら。未来の担い手として生徒らは貴重な経験を積みました。

全共出場に向け、昨年10月から井料さんたち生徒は、1日も休まず牛の世話をしてきました。

「きついときは、いつも牛が励ましてくれた。毎日一緒にいると言葉はしゃべれないけど、考えてることが分かってきてどんどん好きになっていくんです」。

牛が好きという思いで乗り越えた1年でした。

「私の家は畜産農家ではありませんが、将来は大好きな牛に関わる仕事に就きたいです」。

未来を担う子どもたちのさらなる成長が期待される大会となりました。

今大会の悔しさをバネに 父のような日本一の農家を目指す

2大会連続で7区（総合評価の部）で首席を獲得した森田直也さんの息子悠斗さんが今大会、同区で引き手として出場しました。

「同じ高校生が出場するのを知り、負けたくない気持ちから、父に頼み、引き手をすることになりました」。

大会出場に向けて、夏休み期間中は、夕方、毎日のように出品牛の調教や手入れをしてきました。

「小さいころから牛が大好きだったので苦に感じることはありませんでした。何より、日本一になりたいという思いがあったから継続できたのだと思います」。

都城さくら聴覚支援学校
森田悠斗（もりたゆうと）さん（15）

森田さん親子は、これからも日本一の牛づくりに励んでいきます。

「世話をし始めると、なかなか帰ろうとしなくて、困るほど一生懸命でした」と直也さん。

「7区で首席を獲れたものの悔しさも残る大会となりました。もっと勉強して、将来日本一の牛をつくりたい」。すでに5年後、10年後の大会を見据えています。

TOPICS

日本一を目指し、臨んだ出品者を支え続けてきた男たち。

日本一の裏側には、JAや市の畜産技術員がいる

全国初の3年連続内閣総理大臣賞受賞。その裏側には、農家を支えてきた人たちの存在があります。それはJAや市の畜産技術員などの関係者。彼らは、日本一になることを信じ、これまで農家をサポートし続けてきました。

牛が力を発揮できるよう全力でサポート

3連覇がかかった今大会に向け、JAや市の技術員は、代表の候補牛がいる農家をそれぞれ担当。毎朝5時過ぎには畜舎を訪れ、牛の栄養の管理、運動や調教、洗いなどを手伝いながらきめ細やかな指導を行ってきました。

また、宮崎から宮城間約1700キロの牛の運搬でも、牛に負担をかけないよう、技術員16人が帯同し、大会で牛が力を発揮できるよう準備をしてきました。

日本一への思いは、農家よりも強いと感じるほど

6区で出場した土居義信さんは「どんなに大変なときでも、毎朝必ず来て手伝ってくれた。その思いは、農家よりも強いんじゃないかと思うほどです。それがあったから、私もがんばれたのだと思います。同じ目標に向かって、手伝ってくれたことに感謝の気持ちでいっぱいです」とその思いを話します。

サポート体制があったからこその偉業達成

「宮崎牛を、小林の牛を日本一にしたい」。

3大会連続内閣総理大臣賞受賞という偉業を達成できた裏側には、彼らのサポート体制もあったことを忘れてはならない。

1 大会前の牛の拭き上げ。技術員たちは、細心の注意を払って準備にあたっていました。 **2** 搬送で心配された、牛へのストレスは、技術員らの努力により、最小限にとどめられました。 **3** 出品者の好成績を誰よりも喜ぶ技術員たち。 **4** 毎日のように農家を訪れ、牛の状態を確認しました。

INTERVIEW

小林の和牛の歴史を知る

日本一宮崎牛の裏側には、何十年も先人たちが積み上げてきた思いがあります。
ここでは、元畜産課長の園田安さんに市の和牛発展の歴史を聞きました。

市民一体となった取り組みが日本一の産地の礎となった

戦後、消費拡大を予想し和牛に力を入れ始める

昭和20年以前は、小林の畜産業は農耕馬が主流でした。それが、農業用の機械の普及や食生活の変化により、自然に和牛へと移行していきました。

その中で、市は、和牛の生産性の高さ、さらに消費拡大が予想されることから「和牛を特産にしよう」という取り組みを進めていきました。

㊤昭和52年に宮崎で開催された第3回全国和牛能力共進会。㊦西諸畜連には、西諸の和牛改良の基盤となった種雄牛の功績をたたえる石碑があります。

日本一の和牛を目指し組織的に研究を重ねた

昭和28年小林市畜産振興会（昭和51年に再編し、現在の小林市畜産振興会連合会に。）を設立。昭和30年には各地区に和牛勉強会をつくり、「早肥・早熟・連産性に富んだ牛づくり」をスローガンに、飼育や種牛の配合などの勉強に組織的に取り組みました。

その取り組みの結果、小林の牛は県内で高い評価を得るようになっていきました。

しかし、当時は、鳥取県や岡山県が日本一の牛を作っており、そこに追いつくために、農家と行政が一体となって、さらに徹底した研究を行いました。

非農家の協力をもらい市民一体となりPR

また、非農家の方々にもたくさんの協力をいただきました。西諸牛消費拡大推進協議会を設立し、商工会議所などを中心に市民一体となったPRをしたことも、現在に繋がっているのだと思います。

何十年と積み重ねた思い次代につなげていく

良い牛を作ることは、数年でできるものではありません。何十年もの間、市民一体となった取り組みがあったからこそ今の結果があります。先人の思いを受け継ぎ、努力を続けている人たちを誇りに思いますし、その思いを次の世代へとつなげてほしいです。

小林市 元畜産課長
園田 安（そのだ やすし）さん（82）

宮崎牛は私たちにとって世界に誇れる「宝」。畜産のまち小林のこれからをみんなで盛り上げていく。

今回の全国和牛能力共進会での「宮崎牛日本一」の裏側には、県内の予選で出品を競った農家やそれを支えた関係者の努力、そして何よりも何十年も前から日本一を目指し、和牛の改良などに取り組んできた先人たちの思いがありました。

7年前の口蹄疫で、和牛を守るため、昼夜を問わず行った消毒活動には、農家以外の地域の方々の協力がありました。それは、誰もが「畜産のまち小林」を守りたいと思ったからではないでしょうか。

3年後の2020年には、東京オリンピックが開催され、世界中の人々が日本を訪れます。今回の日本一獲得は、オリンピック開催に向け、世界に小林の和牛をPRするための大きな励みとなります。

また、後継者不足が叫ばれているなか、今大会での高校生の活躍は、小林の和牛農家の未来に大きな希望も与えてくれました。

和牛は私たちにとって身近な存在。そしてそれらは、何十年もかけ、市民一体となって作り上げてきた小林が日本、世界に誇れる「宝」です。

これからも、「畜産のまち小林」を、みんなの手でさらに盛り上げていきましょう。

県外の和牛農家に話を聴きました

サポート体制がすばらしい

岐阜県の和牛農家
永瀬 泰幸（ながせ やすゆき）さん

２年前に訪れたとき、市や農協など関係者のサポート体制がしっかりしており、農家として、小林市の環境はとてもうらやましく感じていました。その中で育った牛だからこそ、ここまでの成績を残せているのだと思います。

宮城県民に話を聴きました

取り寄せて、また食べたい

宮城県在住
三浦 和行（みうら かずゆき）さん

全共会場のふるまいで初めて宮崎牛を食べました。ラジオで日本一と聞いていたので、楽しみにしていました。実際に食べてみて、柔らかい中にかみごたえがあって美味しかったです。宮城では見かけないので、取り寄せてまた食べたいです。

市民に話を聴きました

小林の和牛農家を誇りに思う

小林秀峰高校
宮脇 瑠奈（みやわき るな）さん

日本一宮崎牛は聞いたことがありましたが、今回、初めて全共というものを知りました。こんなにも、大きな大会で活躍する小林の農家さんがいることを知り、誇りに思います。これから少しでも小林の和牛に協力したいと思いました。